

---

[研究ノート]

# 郷土の音楽の教材化研究

小学校音楽科の授業実践に向けて

梶間奈保

島根県立大学短期大学部保育学科

[RESEARCH NOTE]

## A Study on Utilizing Traditional Regional Music in Music Education: Practical Applications for Elementary School Lessons

Nao KAJIMA

Department of Nursery Education, The University of Shimane Junior College

# しまね 地域共生センター 紀要

*Bulletin of Shimane Center for Enrichment through Community,  
The University of Shimane Junior College*

vol.

4

January  
2018



島根県立大学短期大学部  
松江キャンパス

---

[研究ノート]

# 郷土の音楽の 教材化研究

小学校音楽科の  
授業実践に向けて

梶間奈保

島根県立大学短期大学部保育学科

## キーワード

郷土の音楽  
音楽教育  
教材研究  
小学校  
授業実践

[RESEARCH NOTE]

## A Study on Utilizing Traditional Regional Music in Music Education: Practical Applications for Elementary School Lessons

Nao KAJIMA

Department of Nursery Education, The University of  
Shimane Junior College

## Keywords

traditional regional music  
music education  
research on teaching material  
elementary school  
classroom practice

## 1 研究の背景と目的

小学校音楽科において地域や郷土の音楽を通して曲の構造を理解したり、音楽の表現力を高めていくといった地域に根付いた授業の充実化は、現行の学習指導要領の課題の1つとしてあげられている(中央教育審議会 2016)。平成29年に告示された小学校学習指導要領音楽科の指導計画の作成と内容の取扱いには「我が国や郷土の音楽の指導に当たっては、そのよさなどを感じ取って表現したり鑑賞したりできるよう、音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲にあった歌い方や楽器の演奏の仕方などの指導方法を工夫すること」(文部科学 2017)と新たな文章が加えられており、授業のねらいや学習者らの実態に合わせてより具体性をもった教材を取り扱う必要がある。また、教科書に掲載されている曲のみならず、地域や郷土の音楽を取り入れていくことも求められている。

小学校の音楽科授業における郷土の音楽を取り扱った実践については、教科書に掲載されている全国的に有名な題材から、徐々に郷土の音楽へと目を向ける傾向がある一方で、郷土の音楽の実演家を招いた鑑賞や楽器の体験に留まってしまう現状(椿本 2016)、さらには伝統音楽の苦手意識からくる題材のアプローチの困難さ(本多・山田 2013)も課題にあげられる。

このような郷土の音楽を題材に扱う授業実践の課題改善の1つとして考えられるのは、郷土の音楽に関する実践研究の積み重ねによる教材の価値の確立である。音楽科教育において郷土音楽に関する授業の実践研究は少ないため、教師側が郷土の音楽の価値や必要性について見出しにくい。また、伝統芸能や民謡を取り入れることで、それらの保存につながる見方もあるが、郷土の音楽を授業で取り扱うことの目的や意味を教師自身がしっかりと吟味した上で実践にあたらないといけない。郷土音楽を通して多様な教育的意義に気付くことができれば、学習者らが自分たちの生活に身近な教材として実感のある活動につながるのではないだろうか。

2つ目の改善点は、地域の素材の発掘である。小学校音楽科教科書で現在取り上げられている郷土の音楽は表1に示すように、全国的によく知られているものがあげられている。

表1. 小学校音楽科教科書で取り上げられている郷土の音楽に関する曲の一部(平成27年度小学校音楽科の教科:教育芸術社、教育出版社)

ソーラン節(北海道)	青森地方の子もり歌(青森県)
南部牛追い歌(岩手県)	花笠音頭(山形県)
会津磐梯山(福島県)	秩父音頭(埼玉県)
大漁節(千葉県)	山中節(石川県)
串本節(和歌山県)	福知山音頭(京都府)
貝がら節(鳥取県)	よいしょこしょ節(山口県)
金比羅船々(香川県)	高千穂の夜神楽(宮崎県)
谷茶前(沖縄県)	※一部のみ掲載

現行の学習指導要領では、第1学年及び第2学年の鑑賞教材については主にわらべうたが取り上げられ、第3学年及び第4学年以降、郷土の音楽や民謡を取り扱うよう示されており、伝統芸能や民謡といった地域の素材が教材として取り上げられることとなる。しかし、冒頭でも述べたように、学習者らを取り巻く生活環境の変化を踏まえながら、教科書の掲載曲だけではなく、地域に根付いた音楽文化に着目することも必要ではないだろうか。小学校での郷土の音楽の扱いについて岡田・石川(2015)らの報告によれば、沖縄県中頭地区の小学校では歌唱活動において郷土(沖縄県)の音楽を96.6%取り入れており、沖縄楽器の実技指導では24.7%が三線やパーランクーといった楽器を導入していると述べている。一方、鈴木・大野(2015)らの行った鳥取市内の小学校における郷土の音楽(貝殻節)の実践実施率は、59%であった。その理由として時間の確保があがっているが、沖縄県で調査をした岡田・石川(2015)らも時数不足の現状について言及している。これは、教師自身が地域素材を教材化していくための時間確保だけではなく、小学校音楽科全体の授業時数の課題や他の指導内容との兼ね合いも考えられる。さらには、郷土の音楽を取り上げるために必要な音源や楽譜、楽器の調達や実演者や指導者の確保など、既存の曲よりも取扱い難い現状といえる。荒木(2007)が指摘するように郷土の音

楽は教材として作られたものではないため、どのような視点で授業を展開していくのか題材によって対応していかなければならない。このように、郷土の音楽を通した授業の実践については、他の音楽教材に比べて手探り状態であり、前述した内容を含む様々な課題が授業実践に対する苦手意識を喚起させるのではないだろうか。

そこで本研究では、郷土の音楽を取り扱った授業実践研究を整理しながら郷土音楽の教材的意義を見出す糸口を探っていきたい。

## 2 先行研究にみる郷土の音楽の授業実践の分析

### 1) 音楽教育における郷土の音楽について

まず、本研究のテーマである郷土の音楽について、本節で整理をしておきたい。現行の学習指導要領では「郷土の音楽」や「地方に伝承されているわらべうたや民謡」、さらには「我が国の音楽」といった用語が用いられているがそれらを指す曲の範囲は広い。伊野(2003)は郷土の音楽が示す具体的なものに「郷土のわらべうた、獅子舞の音楽、お囃子、盆踊り唄、民謡、舞楽や神楽の音楽等々、様々なもの」をあげており、これらを総称して「郷土に根付いてきた伝統的な音や音楽」、つまり郷土の音楽としている。また、小島・藤本(2015)は、教育的観点を踏まえた郷土の音楽について「生活の基盤となっている環境で伝承されてきた音楽」と述べている。つまり、学習者や教師らが生活する地域で深く根付き、長い歴史の中で受け継がれてきた伝承的な音や音楽が、音楽教育の中における郷土の音楽であるといえる。

### 2) 授業実践研究の分析

次に、郷土の音楽を教材とした授業実践研究について、重要な要点である以下3点についてまずは検討をしてきたい。なお、現段階では、郷土の音楽を教材化していくためのプロセスについて検討をしているため、本研究では実践研究として公表されている研究を中心として取り上げ整理し

ていくこととする。

- (1)教材の選定
- (2)授業の展開方法
- (3)郷土の音楽の教材的意義

まず、(1)教材の選定については、平成27年度の小学校音楽科教科書(教育芸術社、教育出版社)に掲載されている郷土の音楽の指導に関連した曲は、約100曲にもわたり、各県の代表的な郷土の音楽とも言うべきものである。しかし、前述したとおり、学習者が生活の中で郷土の音楽とつながり、それらを実感しながら考えを深めていくことが大前提であり、各県を代表する郷土の音楽であっても地域によってはより身近な郷土の音楽が存在するかもしれない。そういった視点をもとに、教材の選定に着目し分析する。

次に(2)授業の展開方法では、実演家による体験型のアプローチが定着してきているものの、学習者たちが郷土の音楽を心身を通して感じ、郷土音楽の良さや本質に気づく段階まで踏み込めていない難しさもある。教材によって授業の展開方法は様々にあり、対象学年によっても教材を変容していく必要がある。ここでは、授業実践研究としてあがっている事例から授業展開について着目する。

そして、(3)郷土の音楽の教材的意義については、実践者、あるいは研究者の観点について取り上げていきたい。

### 3)教材の選定

郷土の音楽を教材に選定する理由として多く挙げられているのは、学習者の生活圏に身近であることであり、これは音楽と生活との結びつきを学習者が気づき、親しみを持てるよう設定していると考えられる。島田(2013)は「祖谷の粉ひき唄」(徳島市)を教材として取り上げた理由として「歌詞が表現する徳島の山の景色や優しい風、そこで暮らす人々の生活などをしみじみ感じて歌うこと」をあげている。また、岡田・石川(2015)の調査によれ

ば沖縄県中頭地区の小学校では、教科書に掲載されている教材「ていんさぐぬ花」「谷茶前」のほか、沖縄方言のわらべうたも取り扱う授業もあるとされている。これらは、音楽の旋律や和声の響きだけではなく、言葉のリズムや歌詞の内容が、学習者にとってより身近な音楽だと実感することのできる要素となる。学習指導要領において歌詞の表す情景や気持ちを工夫して表現する指導内容はあるが、曲の背景や自分とのつながりを意識することが郷土の音楽では重要といえる。

一方、荒木(2005)の研究にも注目したい。荒木(2005)は、学習者の実態や地区公民館、教師らの調査をもとに「金沢市小学校伝承音楽教材集」を作成した。これは伝承音楽研究の理論に沿いながら検討し、授業実践での分析も行っている。また、小島・田中(2014)らの研究や田村(2014)らのように、学習者と共に地域でフィールドワークをしたり、地元の伝承者らと協働しながら教材について選定及び開発をしていく手法もとられている。これらは、学習者たちが郷土の音楽の表面的な内容(作曲もしくは作詞者、どの地域で伝わる歌なのか、どのようなときに歌うのか)のみの情報収集で終わるのではなく、音楽が奏でられている空間や音楽に伴う動作の臨場感、さらには、音楽とその地域の文化の関係性といったより広い視点で学習者一人ひとりが郷土の音楽を捉えていくことができる。つまり、郷土の音楽の内面的な部分と自分の思いを重ね合わせながら郷土の音楽について考えを深めていけるのではないだろうか。

### 4)授業の展開方法

授業の展開は、学習のねらいによって左右され、楽器の有無、楽譜や音源の提示によっても様々である。基本的には、教師と学習者とのやりとりで授業が進んでいくが、郷土の音楽を教材とした場合、外部の協力を得ることが多い。この外部との関わりを授業でどのように取り入れるかは、郷土の音楽の授業を考える上で重要な点であるといえる。外部の導入をポイントにみれば、授業の初回の導入部分で伝承者の実演を鑑賞する機会を



もうけ、学習者たちの興味・関心を引き出す場合と、授業の中で郷土の音楽について学習及び模倣表現を行った後、伝承者の実演を通して、自分たちの表現との比較や音楽の特徴を捉えていく場合の2つのパターンに分けられる。特に前者では田村(2014)や椿本(2016)のように、伝承者と協働しながら授業のプログラムを検討していく授業実践があり、まずは教師側が郷土の音楽について実感したことを念頭におきながら授業の構成がされている。しかし、通常の授業の取り組みとして伝承者との関わりは、1～2時間程度である。両者共に、伝承者の実演や指導以外は、教師側が学習者たちの手本となりながら、充実した活動へと導いていかなければならない。小島(2001)は、日本音楽の指導において教師の西洋音楽の教養が邪魔をしていると指摘し、教師自身が伝統音楽を積極的に学ぶ努力をする必要性について述べている。また、本多・山田(2013)らも、伝承者が授業でより効果的な参加及び指導ができるためには、教師側の伝統音楽の指導は大きいと述べている。つまり、授業で取り扱う郷土の音楽の技能習得を教師側がある程度把握しておくことで、伝承者の授業参加がより効果的になるといえる。

そして、授業の展開方法で興味深いのは、外部の導入の有無に関わらず、最終的には郷土の音楽のモチーフや断片を活用した創作音楽をつくることである。小学校音楽教科書では、郷土の音楽紹介や資料掲載とともに、音楽づくりを示す内容が盛り込まれ、主として旋律づくりが展開されている。また、小学校音楽科の指導内容は、「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「鑑賞」の各区分がそれぞれ独立したものではなく、相互に関わり合っていく必要がある。そのため、音楽を鑑賞するのみの活動ではなく、その音楽を身体を使って歌うことにより表現の工夫を知り、楽器を演奏することにより音楽の特徴や躍動感を他者と共有できるといえる。しかし、限られた単元の中で様々な学習形態を通して1つの曲について理解を深めることは、一様に効果的とはいえない。梶田(2015)は、文楽を題材にした自身の授業について「書く活動よ

りも実際に声を出すなど、体を使った活動を中心として学習者の心身に深く刻むことが大切」と振り返っている。曲を多面的にとらえることはどのような授業においても必要であるが、題材としている郷土の音楽のもつ特徴は何であるのか、教材的価値を見出すことが重要である。

## 5)郷土の音楽の教材的意義

郷土の音楽の教材的意義について、いくつかの研究結果や考察内容を整理した上で述べていく。以下の表2は、各研究者及び授業実践者らによる郷土の音楽の教材的意義に関連した内容を筆者がまとめたものである。

表2. 各研究者による郷土の音楽に対する教材観

著者	郷土の音楽に対する教材的意義に関連した項目		
生田 (2003)	民俗芸能自体を伝承(教育)する	民俗芸能を通して主体の学びを拡げていく教育	
伊野 (2003)	自分につながる人々と音楽との関係性への気づき	自分自身につながる音楽と他の人々の音楽を相対化して観る能力の形成	伝統性への気づき
小島 (2008)	日本音楽の導入的な意義	生活と結びついて存在する音楽の魅力	お話、踊り、言葉等の多媒体によるパフォーマンス性

これを見ると、郷土の教材的意義は大きく分けて以下の4つのカテゴリにまとめることができる。

- (1) 伝統文化への気づき
- (2) 自分と地域との結びつき
- (3) 自己の音楽表現の拡大
- (4) 総合表現の生成

(1)の伝統文化への気づきでは、伊野(2003)が「伝統性への気づき」が郷土の学習の上で重要な点としてあげており、郷土の音楽を体験したり学んだりする機会は小島(2008)の指摘するように「日本音楽の導入」ともいえる。この日本音楽は、広義には郷土の音楽や民俗音楽、そして日本の伝統音楽も含まれている。西洋音楽が生活の中で知らずのうちに定着されている現代社会において、

郷土の音楽は非常に重要な教材であるといえる。

(2)自分と地域との結びつきについて、表2に示すように、伊野(2003)、小島(2008)の両者が共通して「つながる」「結ぶ」といった音楽との結びつきについて述べている。前述したとおり、主体である学習者の生活圏に根付いた伝承的な音や音楽を題材とすることにより、積極的に興味関心を引き出すだけでなく、自分とその音楽、またその音楽を取り巻く歴史的かつ社会的背景を感じることによって、その音楽の存在価値に気づかされるのである。

次に、(3)の自己の音楽表現の拡大では、自己の音楽技術や音楽表現力の深化に加え、自身と関わりの深い郷土の音楽のみならず、様々な音楽に対しても意識的に捉えていくことができる可変性が含まれている。これは、学習者や教師らが積極的に学びを拓げていくことへもつながる。

最後の(4)総合表現の生成では、郷土の音楽は、歌詞やその歌や音楽に伴って行われる行為(動作や踊り、作業など)と深く結びついている。動作の中の足の踏みリズムや腰の位置、それらと音楽を同期させながら、呼吸を合わせて音や音楽が奏でられていく。また、それらを取り巻く空間全体も郷土の音楽といえ、様々な要素が集約されて生成される関係性も重要であるといえる。

以上の4つの教材的意義の観点に加え、本研究では(5)「発信者としての芽生え」を挙げたい。これは、小島(2001)が「日本の伝統音楽の指導で目指すのは「伝統」及び「創る」ことである」と述べているように、教師側から、あるいは伝承者から教え込まれたものが全てではなく、学習者自らが創り、それらを授業や地域といった場で発信していくことが、郷土の音楽の様々な要素をアウトプットしていく大事な手続きであるといえる。また、この「発信」は、授業の中において学習者同士が教え伝え合う姿、あるいは、地域の郷土芸能の団体に入ってその文化の重要性について他者へ発信したいという気持ちなど、郷土の音楽の理解がより深まった状態といえよう。これらの5つの観点は、相互に関連し合いながらも、それぞれが授業や学

習者の取り組みにおいてどういった場合で見られるのか実践的な課題を検討していかなければならない。

### 3 おわりに

平成29年に告示された小学校学習指導要領【音楽】では、第1の目標に以下のように書かれている。

「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を(中略)育成することを旨とする」

この目標を目指すために3つ項目があげられているが、この項目は平成20年に告示された現行の学習指導要領には明記されていない内容であり、さらには「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる」と新に付け加えられていることから、学習者及び教師が、音や音楽について日常的な生活や地域を含む社会を通して考えていかなければならなくなったといえる。これはまさしく、郷土の教材的意義の「自分と地域との結びつき」に通じる部分といえ、一般的な音楽に対する感性や知識だけではなく、教科書では感じ難い、変容しながら地域に根付いている音楽を心身を通して感じていくことが求められている。

しかし、郷土の音楽に対する教師側の消極的な姿勢や伝承者との連携をどう効果的に取り組むのか、それらに対する研究や実践についての議論が深まっていかなければならない。一方で、音楽の時間数不足や楽器や楽譜の調達の有無といった物理的な課題もあり、学校全体の計画の中で郷土の音楽とどう向き合うのか検討されなければならない。

こういった小学校現場の状況を受け、教員養成側はどのような郷土の音楽教材開発を発信していけるのか、小学校現場と連携をとりながら学校の実情に合わせて検討していくことが、本研究の今後の課題である。

## 引用文献

- ・荒木泰彦. 音楽授業の中で郷土の音楽をどう扱うか. 学校音楽教育研究, 11(0), 201, 2007.
- ・中央教育審議会. 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申), 2016.
- ・本多佐保美, 山田美由紀. 実演家との連携をめざした日本伝統音楽のアウトリーチ授業. 音楽教育実践ジャーナル, 10(2):56-62, 2013.
- ・生田久美子. 民俗芸能を学ぶ学習者たち—2つの神楽の伝承事例を通して, 東京, 東京大学出版, 185, 2003.
- ・伊野義博, 郷土の音楽: その特性と教材性. 学校音楽教育研究, 7(0), 154-165, 2003.
- ・小島律子. 音楽授業の中で郷土の音楽をどう扱うか. 学校音楽教育研究日本学校音楽教育実践学会紀要, 12, 216, 2008.
- ・小島律子, 藤本佳子. 音楽科教育における「郷土の音楽」の指導内容モデル: お囃子の教材化における郷土性に着目して. 教科教育学論集, (14), 31-46, 2015.
- ・栢田裕子. 小学校6年生における「文楽」の鑑賞—「文楽ってどんなもの ～語りの音楽～」の授業実践. 音楽教育実践ジャーナル, 13(1), 46-53, 2015.
- ・宮下俊也, 小島美子, 西村朗, 木暮朋佳, 福士幸雄, 澤田篤子. 学校教育において日本伝統音楽の学習を

- どう位置づけたらよいか. 学校音楽教育研究, 5(0): 144-153, 2001.
- ・文部科学省編. 小学校学習指導要領 音楽編解説, 東京, 文部科学省, 2008.
- ・新実徳英監修. 小学校音楽 おんがくのおくりもの4～6, 東京, 教育出版, 2017.
- ・小原光一ほか監修. 小学生の音楽3～6, 東京, 教育芸術社, 2017.
- ・岡田恵美, 石川理子. 沖縄県の小学校高学年を対象とした郷土音楽学習の教材化に向けて: 学校現場へのアンケート調査や歌三線指導の実践から見えた課題. 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, (22), 47-59, 2015.
- ・島田郁子. 郷土の音楽を教材とした音楽学習の展開: 「阿波踊りプロジェクトを成功させよう」. 学校音楽教育研究, 17(0): 266-267, 2013.
- ・鈴木慎一郎, 大野桂. 《貝殻節》の教育実践の現状と課題: 鳥取大学附属小学校2014年度の実践から. 地域学論集鳥取大学地域学部紀要, 12(1), 79-91, 2015.
- ・田村にしき. 地域の伝承者・実演家との協働による謡の授業実践: 小学校4年生を対象に. 学校音楽教育研究, 18(0): 193-194, 2014.
- ・椿本恵子. 「御田植神事」の実践にみられる地域の伝統音楽を取り上げることの有用性. 学校音楽教育研究, 20(0), 142-143, 2016.

## 参考文献

- ・小島律子, 田中龍三, 椿本恵子[他], 藤本佳子, 楠井晴子. 郷土の音楽の教材化(第2報)大阪教育大学

- と附属小・中連携プロジェクト. 教科教育学論集, 14, 85-102, 2015.


受稿:平成29年10月2日 受理:平成29年11月10日

# しまね 地域共生 センター

*Shimane Center  
for Enrichment through Community,  
The University of Shimane  
Junior College*



島根県立大学短期大学部  
松江キャンパス

 文部科学省  
地(知)の拠点